



【研究ノート】

1930-50年代における日本の水族館での鯨類飼育

Captive Cetaceans at Aquariums in Japan in the 1930s-50s

宇仁 義和*

Yoshikazu UNI

はじめに

本論の目的は、日本における水族館での鯨類飼育の初期の状況を資料的に裏付けながら記述することにある。鯨類飼育の歩みについて、水族館の本格的な歴史研究書である『水族館』では次のように記されている。最初に鯨類を飼育したのは静岡県の伊豆半島西岸にあった中ノ島天然水族館（現 伊豆・三津シーパラダイス）で、昭和9年（1934）年にハンドウイルカを飼育、関西では神戸市の阪神水族館で昭和10年頃にゴンドウクジラが飼育されていた。戦後はアメリカの大規模な飼育施設に学び、1957年（昭和32）に神奈川県藤沢市の江ノ島マリンランドが開館してイルカのショーを演出し、現代的なイルカ飼育につながった。おなじ頃には大阪府岬町のみさき公園自然動物園水族館でもオセアナリウム式の大水槽でイルカが飼育された（鈴木2003：222-233）。しかしながら同書は一般向けに書かれたものであるためか、引用文献はその一部が示されているだけであり、一部には引用を明示しない記述も見られる。また、他の水族館に関する包括的な書籍（鈴木・西2005、鈴木・西2010、村山・祖一・内田2010、内田・荒井・西田2014）、1928-1968年の日本の水族館における鯨類飼育年表（中島1967）も、やはり典拠に乏しい傾向が見られる。

資料と方法

本論で用いた資料は、水族館の歴史や飼育、展示に関する論文や雑誌記事あるいは単行本や雑誌といった出版物、水族館など施設内用の小冊子、新聞記事、絵葉書などの印刷物や写真、加えてNHKアーカイブス学術利用トライアル研究II「映像資料を利用した水族館展示と鯨類飼育の歴史研究」で視聴した映像（宇仁2014）である。対象とした飼育事例は、1930年代の中ノ島水族館でのハンドウイルカとミンククジラ、1957年の江ノ島マリンランドのイルカ類、おなじく1957年のみさき公園自然水族館のオセアナリウムによるイルカ類、そして1930年代の阪神水族館での小型鯨類である。

* 東京農業大学オホーツクキャンパス

原稿受理日：平成26年12月10日



中之島水族館でのハンドウイルカとミンククジラの飼育

静岡県沼津市にあった中之島水族館での鯨類の飼育に関する資料として、同水族館が発行した絵葉書と便箋（秋山泓子氏蔵）が存在する。ひとつは袋に「元祖天然 中ノ島水族館繪葉書／伊豆三津海岸／富士見龍宮 中ノ島天然水族館發行／電話三津三十一番」（／は改行）と記された5枚組のものである。このなかに、飼育していたミンククジラやハンドウイルカの写真を用いた絵葉書がそれぞれ1枚あった。ジャンプするハンドウイルカの写真の絵葉書には右からの横書きで「人語を解する海豚の一種／日本に只一頭のトルジョップス」とのキャップションが付けられ、空中にジャンプするイルカと岸から手すり越しに観覧する客4人が写されていた（図1）。ミンククジラは口を大きく開けた採餌の様子と思われる写真で、キャップションには「我が国にて始めて飼育に成功したる鯨／奇観鯨の食事振り」とある。残念ながら飼育場や建物などは写っていない。写真の個体は三角形の頭部と白帯が目立つ胸びれからミンククジラであることが明らかで、小型の個体のように、また痩せているように見える（図2）。これらの絵葉書は中之島水族館でハンドウイルカとミンククジラが飼育されていた証拠といえる。

残念ながらこれらの絵葉書には年代が記載されていない。飼育年代を



図1 中之島水族館発行の絵葉書。
飼育池でジャンプするハンドウイルカが写された写真。

キャップションは「人語を解する海豚の一種／日本に只一頭のトルジョップス」



図2 中之島水族館発行の絵葉書。
飼育池で口を開けた索餌の様子が写された写真。

キャップションは「我が国にて始めて飼育に成功したる鯨／奇観鯨の食事振り」

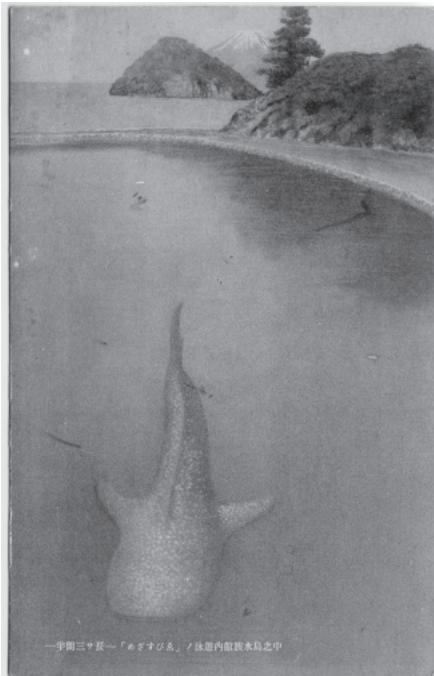


図3（左） 中之島水族館発行の絵葉書。飼育池に泳ぐジンベエザメの絵が描かれている。
キャプションは「中ノ島水族館内游泳ノ「ゑびすざめ」—長サ三間半—」

図4（右） ジンベエザメのスタンプが押された中之島水族館発行の絵葉書の宛名面

示す記述としては、日本の鯨類学のパイオニアである小川鼎三が中之島水族館を訪れ、それまでシャチと記載されていた種名板に対して「トルシオップス」と名前を訂正するように進言したのが1934年であることから（小川 1973：32）、これらの絵葉書の発行は1934年以降と考えられる。ミンククジラの飼育については、写真に記載された日付と見られる書き込みを根拠に中島ら（1978）が1938年（昭和13）としている。これが正しければ、この絵葉書の発行は1938年以降となる。

なお、内田（2010：18）が、1934年に鯨類ではないが全長4.5mのジンベエザメを4ヶ月飼育したとするとおり、秋山氏が所蔵する絵葉書にはジンベエザメが飼育池で泳ぐ絵を描き「中ノ島水族館内游泳ノ「ゑびすざめ」—長サ三間半—」とキャプションが付けられた作品やジンベエザメのスタンプが押された絵葉書もあった（図3・4）。絵葉書の発行時期を示す資料はないが、戦前の発行と考えられ、発行と同時期かその前にジンベエザメが飼育されていたことが伺える。

江ノ島マリンランドでのイルカ類の飼育

「江ノ島水族館の沿革」によると、1952年（昭和27）に株式会社江ノ島水族館が設立、翌年に水族館の建設工事を開始し、1954年7月1日に江ノ島水族館が開業した。さらに「昭和32年には、



当初からの計画であったくじら類の飼育展示のために、道路をへだてた海側にくじら類放養池を建設し、江ノ島マリンランドと呼称して5月3日に営業を開始した」とあり、鯨類の飼育は当初からの計画であったことが記されている（江ノ島水族館1979：148-149）。また、水族館とマリンランドの間は地下道で結ばれていた（中島1960）。

マリンランドの規模については、ヒゲ鯨がプールに浮かぶ絵が表紙に見える一方、建物や飼育動物の写真が無いことから開館前の印刷と思われる『世界最大江ノ島マリンランド案内（鯨の知識）』（A5判、雨宮・西脇監修n.d.）では、池の面積が長さ45m、幅25m、水深3.10～6.10mと記され（図5）、また開館後の入館者向けと思われる『水族館・マリンランドシリーズ① 江ノ島マリンランド がいどぶっく』（B5判、中島1960、表紙や本文中には「江の島」の記載もある）によるとマリンランドのサイズは長

さ45m、幅25m、深さ6m、水面積1000m²となっている。プールは長方形ではなく橢円に近い形のためか、面積は長さ×幅よりも小さい算出であった。また、伊豆半島で捕獲されたイルカを江ノ島マリンランドへ陸送する様子を収めた映画「鯨箱根をこゆ」（企画：日活株式会社製作、協賛：株式会社江ノ島水族館、製作：岩波映画製作所、カラー21分、1957年）には、マリンランドの工事の様子、見取り図や施設についての紹介、そして完成後に満員の観客が見守るなかを泳ぐハナゴンドウの様子も記録されている。また、当時イルカ飼育の責任者であった中島将行氏を特集したNHKのドキュメンタリー番組「ある人生『鯨博士』」（1965年5月23日放送）には、1965年当時でもイルカショーの担当は作業服にヘルメット姿の男性であること、小冊子に記載された図面のとおり「海獣生態研究室」が設けられ、室内にはイルカ全身骨格や数種類の頭骨、中島氏が下顎の歯槽に歯を入れていく様子が記録されていた。なお、この番組は子ども向けの書籍が刊行されている（神戸1966）。

イルカの輸送については映画「鯨箱根をこゆ」のほか、NHK週間ニュース「珍しい鯨の陸送」（1957年5月24日放送）でもハナゴンドウが運ばれる様子が漁港、沿道、マリンランドとともに記録

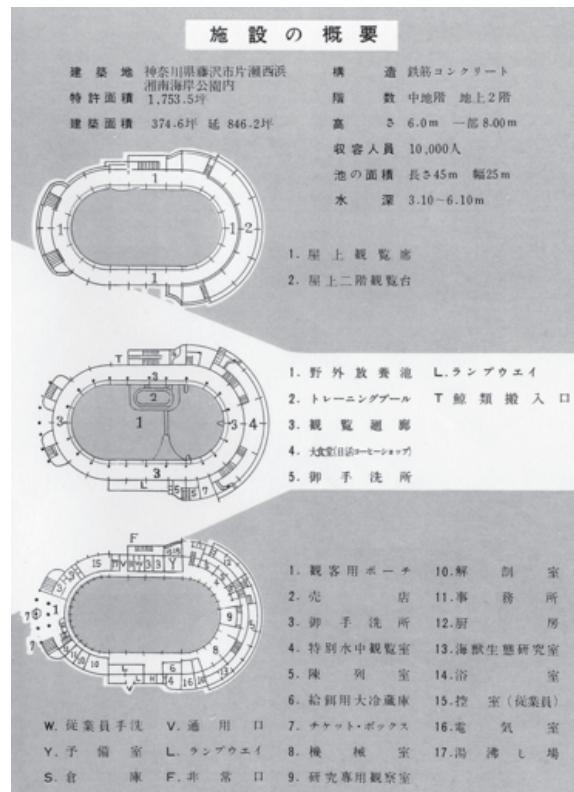


図5 『世界最大 江ノ島マリンランド案内』に収録された江ノ島マリンランドの平面図



されていた。

江の島マリンランドでは、はじめミンククジラのようなヒゲ鯨を飼育することが目指されていたという（中島 1994：199-207）。これについては、『世界最大

江ノ島マリンランド案内』の表紙にはマリンランドの絵が描かれ、プールには長径の四分の一ほどのヒゲクジラが浮かんでおり、印刷物にまで示すほど実現に向けて力が入れられていたことがわかる（図 6）。

みさき公園自然水族館でのイルカの飼育

みさき公園は南海電気鉄道 70 周年記念事業として「自然動物園、自然水族館を中心とする施設とする理想的な公園を建設して、京阪神における一大レクリエーションセンターとするもので」1957 年 4 月 1 日に開園した（南海電気鉄道株式会社経営企画室 1957：17）。『南海電気鉄道百年史』によると、みさき公園「自然水族館は、

海岸に接した敷地一万五六〇平方メートルに、オーシャナリウムという新しい試みをとり入れた。オーシャナリウムは英語で海洋水族館の意味で、名のとおり、海中の自然環境に近い状態で、魚類の観察ができるという、他の水族館では見られないものであった。館内に設けた大小四つのプールは、上面からも側面からも魚の生態が観察できる」もので（南海電気鉄道株式会社編 1985：300）、具体的には「オセアナリウムとして設置された大水槽のうち、イルカの飼育を目的としたのは第 3 号大プールで、面積は $16.5m \times 26.0m = 413$ 平米、水深 2.7m、水量 1,250 トン、西側面に $1.2m \times 1.2m \times$ 厚さ 3 cm の観覧ガラス窓を 8 枚備えていた」（荒賀 1960：1）。みさき公園自然水族館では、側面から水中を直接見せる展示が実現していたのである。

ここでイルカの飼育個体は 1957 年のハンドウイルカに始まり（中島 1967）、伊豆半島西側の安良里から採集船「みさき丸」（記述はないが「みさき公園自然水族館」の附属船舶と想像される）で 40 時間かけて運ばれた（堀家 1975：121）。

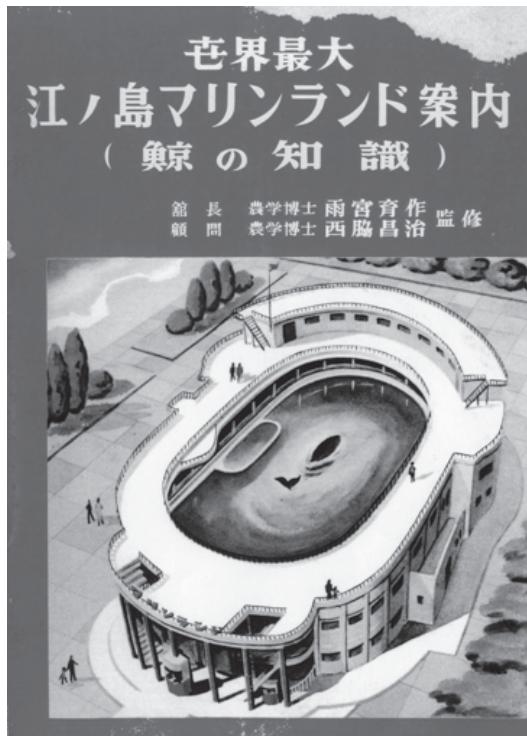


図 6 『世界最大 江ノ島マリンランド案内』の表紙に描かれたヒゲクジラが浮かぶ江ノ島マリンランドの完成予定図



阪神水族館でのコビレゴンドウとカマイルカの飼育

阪神水族館は1934年（昭和9）3月に完成、4月1日に「陸の竜宮 阪神水族館」のキャッチフレーズで開館した（前田1955：119、堀家1975：98）。写真からは石造りのヨーロッパの城郭風の建物に見える（堀家1975：97）。ここでの小型鯨類の飼育に関する記述は、親会社の阪神電気鉄道の社史に見られ、ゴンドウクジラの飼育は1936年（昭和11）のこと、はじめ3頭運んで2頭成功し後に6頭を運んだとする（前田1955：121-122）。飼育担当の堀家邦男の回想では昭和12年としているが、新聞記事によれば1936年10月7日に和歌山県太地から阪神水族館の阪神丸が小型鯨類を運搬した記事がある（大阪毎日新聞夕刊昭和11年10

月7日、図7）。翌1937年の同日10月7日には同じ阪神丸が南紀沿岸でコバンイタダキやミノカサゴなどの珍魚の採集を終え帰港という記事があり（大阪毎日新聞19568号昭和12年10月7日）、堀家の回想で「昭和12年」としているのは（堀家1975：108）、これとの混同があったのかも知れない。

このゴンドウクジラの輸送は、まる1日以上かけて鯨類を輸送した最初の成功例のようである。その方法は、海岸に立地した水族館の条件を活かし、クジラを船の甲板に寝かせ、身体をふとんやこもで包みポンプで海水を不斷にかけ、水族館の近くで輸送船からはしけに載せ換え、水族館ではレールを敷設しておきトロッコではしけごと乗せて飼育プールに運び、トロッコからプールにクジラを放り込むというものだった。また、餌にはイカを用いたらしく、当時の看板の写真には「モリモリいかを喰べてます」という一文が見える（前田1955：121-123）。また、分娩直後に死亡したが出産もあった（堀家1975：109-116）。

阪神水族館での展示方法は、自然の海の入江を仕切った中之島水族館とは異なり、陸上のコンクリートプールで飼育するものであった。その特徴として、人工的な環境での飼育技術の確保、プール水面が地平面ではなく大人の胸付近にあり、海面飼育に比べて観察がしやすい、などの利点を有していた。飼育されたゴンドウクジラの種については、堀家（1975：109-115）に掲載された写真を判読し、背びれや胸びれの形態、体長2間半（4.5m）という大きさからコビレゴンドウと判断した。



図7 太地から阪神水族館へのゴンドウクジラの輸送を伝える新聞記事（大阪毎日新聞夕刊昭和11年10月7日）



小川鼎三は阪神パークを1934年8月に訪れ、兵庫県武庫郡大庄村丸崎江島（現：尼崎市南部）で捕獲されたカマイルカ1頭が展示されているのを観察したとする（小川1973:37）。大庄村は、かつて兵庫県武庫郡に所属していた村であり、現在の尼崎市南西部（大庄地区）にあたる。しかしながら、小川が記す「丸崎江島」やそれに近似した地名や島嶼は現在の地図には見つけることができず、また、『大庄村誌』（大庄村教育調査会1942）や『武庫郡誌』（武庫郡教育会1921、復刻版1973）にも記述が見られなかった。当該地はすでに埋め立てられた可能性が高く、また人家のないごく小規模な島だったため自治体誌に記述されなかつたのかも知れない。

なお、鈴木（2003:235-236）の阪神パーク水族館の写真や記述は『水族館の魚達』や『輸送奉仕の五十年』から引用と思われる。

飼育池の変遷とその効果

1930年頃に中之島水族館で始まった鯨類の飼育は、自然の入江を網で仕切った飼育施設で始められた。イルカの飼育プールの水面は地面より低く、目の高さからかなり低い位置での展示であった。1936年の阪神水族館では、陸上にコンクリート製の飼育プールを設備したことで視線に近い位置での観察が可能となり、ジャンプなどが目の高さで見られるようになった。たとえばウェブサイト「阪神ナウ」には、阪神水族館の飼育池でジャンプするコビレゴンドウの写真が掲載されている（https://hanshin-now.com/topics/100th/img/k06_2.jpg 2014年12月9日閲覧）。1930年代の鯨類飼育での展示は、水面を上から見るか水面上に出た身体を見る展示であったのに対し、1957年のみさき公園自然水族館のオセアナリムでは、プール側面に設けられたガラス窓をとおして横から遊泳する姿の観察が可能となる展示となった。水中の様子が鮮明に、しかも横から可能になったという意味で画期的な展示といえる。また、同時期に開館した江ノ島マリンランドでは、大規模な飼育プールを活かし、アメリカでの研修の成果も取り入れ、イルカショーを導入した。

おわりに

中島（1967）で示された鯨類飼育事例のうち、下関水族館についてはNHK週間ニュース「鯨の列車輸送～下関の水族館へ贈られるゴンドウクジラ」（1958年5月25日放送）で安良里港に飼われているハナゴンドウが船で沼津に運ばれ、そこで汽車に乗せられ下関に向けて運ばれる様子が記録されていたことがわかった。しかし、それ以外の事例については調べることができなかつた。

一方、今回の対象とした水族館に限らず、関西の水族館は古い時代の記録が少ないことが浮き彫りとなつた。これは、第二回水産博覧会による和田岬水族館、第五回内国勧業博覧会附属の堺水族館を前身に恒久施設となった堺水族館、今回取り上げた阪神水族館など古く歴史ある重要な水族館が現存せず、後継施設も存在していないことが直接的な原因であろう。加えて、大学研究者との深い関係が関西では築かれなかつたことも影響しているように想像される。



日本の水族館における鯨類飼育に関する歴史研究を進めるには、さらなる資料検索が必要である。

謝辞

本論を記すにあたり、次の機関や個人にお世話になりました。東京農業大学オホーツク学術情報センター、NHK アーカイブス、神奈川県立図書館、尼崎市立中央図書館、神戸市立中央図書館、新江ノ島水族館、竹内賢士氏（日本近代捕鯨史研究室）、上野尚美氏（沼津市歴史民俗資料館）、香山薰氏（伊豆・三津シーパラダイス）、秋山泓子氏。なお、本論は JSPS 科学研究費補助金 23501209 「もうひとつの近代鯨類学「第一鯨学」の形成と展開」（基盤研究 C：2011-2013）の補助を得て行いました。

引用文献

- 荒賀忠一 1960 「魚病治療の面よりみた開放式大プールの利用について」『動物園水族館雑誌』2(1)：1-2
内田詮三 2010 「イルカ飼育の歴史」『海獣水族館』村山司・祖一誠・内田詮三編著 東海大学出版会 pp12-27
内田詮三・荒井一利・西田清徳 2014 『日本の水族館』東京大学出版会
宇仁義和 2014 「NHK アーカイブス保存映像の文化人類学的調査の可能性」『北海道民族学』10：77-86
江ノ島水族館 1979 『江の島水族館 25年のあゆみ』江ノ島水族館
大庄村教育調査会編 1942 『大庄村誌』大庄村教育調査会
小川鼎三 1973 『鯨の話』中央公論社
神戸 1966 「クジラ博士」『NHKある人生：ジュニア版 2』日本放送協会編 岩崎書店 pp5-39
鈴木克美 2003 『水族館 ものと人間の文化史 113』法政大学出版局
鈴木克美・西源二郎 2005 『水族館学 東海大学自然科学叢書 1』東海大学出版会
鈴木克美・西源二郎 2010 『新版水族館学 東海大学自然科学叢書 4』東海大学出版会
中島将行 1960 『水族館・マリンランド シリーズ① 江ノ島マリンランド がいどぶっく』
中島将行 1967 「イルカー捕獲から訓練まで」『どうぶつと動物園』20(7)：6-9
中島将行 1994 『クジラはなぜ優雅に大ジャンプするのか』実業之日本社
中島将行・花輪治作・山田二郎 1978 「過去 50 年間に三津水族館において飼育された小型鯨類」『動物園水族館雑誌』20(4)：93-97
南海電気鉄道株式会社編 1985 『南海電気鉄道百年史』南海電気鉄道
南海電気鉄道株式会社経営企画室 1957 『南海 70 年のあゆみ』南海電気鉄道
堀家邦男 1975 『水族館の魚達』泰流社
前田純一 1955 「阪神パークと水族館」『輸送奉仕の五十年』阪神電気鉄道株式会社臨時社史編纂室編 阪神電気鉄道株式会社 pp118-123
武庫郡教育会編 1921 『武庫郡誌』武庫郡教育会（復刻版 1973）
村山司・祖一誠・内田詮三編著 2010 『海獣水族館』東海大学出版会